

視点1

共に暮らす中で育つといふこと

佐藤菜穂子

(幼稚園教諭)

スについて日々迷うことがばかりだからです。

幼児が主体的に活動する中で、友達とつながるうれしさを味わいながら、友達の思いを感じたり、互いの意見を調整したりすることができるよう、と願ってはいるものの、友達とのかかわりよりも自分のしたいことに向かうことの多い幼児もいます。私がそのように捉えていた幼児、A君の姿を通して協調性について考えてみたいと思います。

A君は五歳児。私は年中時から担任をしています。着替えをしながら朝の出来事を伝えてくれたり、製作した物について説明してくれたりするなど、ゆったりとおしゃべりを樂

佐藤菜穂子（さとうなほこ）

秋田大学教育文化学部附属幼稚園教諭。

しむ男児です。A君とのやりとりは私にとても穏やかで樂しみな時間となつていきました。

A君は、年中の頃から積み木やブロックが大好きで、線路や建物など、毎日のように何かを組み立てて遊ぶ姿が見られました。時折他の男児と一緒に組み立てる様子も見られましたが、大抵は一人で取り組んでいました。

保育者としては、もう少し友達とのかかわりにつなげたい、という願いを持つていました。

年長に進級してひと月ほどたつたある日、私が遊戯室へ行くと、A君が巧技台を並べていました。B子、C子の二人の女児と一緒に一本橋やはしごを組み立てようとしているようです。ままごとの好きな二人の女児とA君がどのようにかかわっていくのかが興味深く、私は三人のやりとりを見守りながら組み立てに参加しました。A君は「もうちょっとそれあつちにやつて」と指示を出すなど、この場

をリードしている感じがしました。動きを止めることもなく、次々と迷いなく用具を選び、位置を決めていくA君。黙つてその組み立てに協力していくB子とC子。なんだかそれがとても当たり前なことのように進む光景を、少し不思議な気持ちで私は見ていました。

滑り台を組み立て終えると、女児たちは出来上がったコースで遊び、そのうち、囲まれた真ん中の空間を使っておうちごっこを始めました。すると、A君は一人で黙々とその場に積み木を運び、台所を作つていきます。少しその場を離れた私が戻ると、A君がお父さん、二人の女児はそれぞれお姉さん、赤ちゃんという役割になつっていました。「お父さん、お仕事頑張ってね」と話し掛けられても、聞いているようないないような感じのA君は、まだ積み木で門や屋根を作り続けていました。

そこへD子とE子が来て、ごく自然に、三人が組み立てた巧技台のはしごを渡ろうとし

ました。すかさずB子が「ここおうちなんだから勝手に入らないで」と言いました。「ちゃんと『入れて』って言つて」とC子。D子は「じゃあ、いいよつー」と語気が強くなり、それまで和やかに過ぎていた場は一気に緊張した雰囲気に包まれました。

D子とE子は一度その場を離れ、少し間をおいて今度は「入れて」と言つてきました。

おいて今までのやりとりでは関心も持つていなかのように見えたA君が、はつきりと、しかしさりげなく「『おじやまします』つて言つてね」と言つたのでした。この場に生じていた緊張感がこの言葉でふつと和らいだように感じられました。

れました。A君のほうも、おままごとをしたい女児たちの気持ちを察し、まんざらでもない様子でお父さん役を受け入れながら、組み立てることを楽しみ続けています。多くを語り合うわけではないものの、互いにしたいことを認め合い、一緒に過ごす心地よさを感じていたのではないか。

後から来たD子、E子に「『おじやまします』つて言つてね」と言つたA君のさりげない言葉からも、相手の気持ちを察して発しているのではないかということを感じました。D子とE子の登場によつて互いに嫌な雰囲気になつた場において、「おじやまします」という言葉は、どちらも不快にさせず、どちらも拒否しないような絶妙な言葉だったと私は感じました。

B子とC子は巧技台での遊びの経験が少ないので、組み立てをA君に頼つているように思いましたが、それだけでなく、これまで生活を共にしてくる中で、A君の良さや得意なことがわかり、信頼もしているように感じら

この「『おじやまします』つて言つてね」が「じやましますつて言つてね」に聞こえたことから、おかしくてみんなが笑い、「じやまし

ます」「えへへ」といつたやりとりを繰り返し、場が和みました。子どもたちなりに、雰囲気を壊さず、でもそれぞれやりたいことを進めたいという思いがあるのでしょう。

このときの姿は、互いに強く求め合つたり言葉を交わしたりするといったかかわり合いではありませんでしたが、それまでの生活の中で互いを知り、立場を察したり、心地よく活動できるように幼児なりに考えて行動したりしていることが感じられました。

それまで私は、A君が好きなこと、得意なことを味わえる時間や場を保障しつつ、それを認め、喜び、一緒に楽しむことを心掛けてしていました。「友達も誘つてみよう」「一緒にやってみよう」と直接的な言葉を掛けることもありましたが、A君はあまり受け入れることがなく、友達とのかかわりにおいて経験が少ないのでないか、協調性など人間関係の育ちに心配はないのかと考えることもあり

ました。それでも、A君が周囲の友達をどのように見ているのか、あるいはA君に対する周囲の見方を捉えようとしながら、クラスの中でのA君の存在を大事にすることを心掛けっていました。

そんな経緯もあつたため、さりげなく相手の気持ちを察して巧みな言葉で遊びを進めていたA君の姿、A君のことを理解して受け入れていたB子やC子の姿に、はつとさせられたのです。

A君は保育者とのかかわりを基盤に、安心感・安定感を持つて自分の思いを出して生活することができていました。その中で、保育者を介した他児への関心やかかわり、集団の雰囲気などから、互いを理解し受け入れる気持ちが育つてきていたのかもしれません。そうした子どもたち自身の育つ力を信じ、育ちを実感するときに立ち会える喜びを感じながら日々の保育を楽しんでいきたいと思います。